

女性たちのつくる平和

講師 竹中 千春

東京大学法学部卒業後、東京大学助手、立教大学助手、明治学院大学助教授・教授を経て、2008 年から立教大学教授。日本国際政治学会事務局主任、日本政治学会・日本比較政治学会・アジア政経学会・南アジア学会・日本平和学会理事。専門は、国際政治、南アジア政治、インド現代史、ジェンダー研究。



▲分かりやすいお話をしてくださった講師

これまでの国際政治は、各国の閣僚にしても武装勢力にしても男性の顔が前面に出てくる中で語られることが多く、例えば、有力政治家の未亡人であるといったような特別な者でない限り、女性が前面にでてくることはなかった。しかし、近年はそういった状況にも変化が見て取れる。平和とジェンダーについて考えた時、両者の価値は似ており、国際関係の見方あるいはジェンダーの見方によって定義が異なる。現状維持こそが好ましい状態であるという考え方もあれば、武力紛争あるいはジェンダー的紛争が存在しないことこそが好ましい状態であるという考え方も成り立つ。さらに突っ込んだ考え方をすれば、自由・平等・人権・民主主義のいずれもが実現できることこそが好ましいという考え方も成り立つのである。

平和とジェンダーという 2 つの視点から社会を見つめると、

- ①平和だが女性が抑圧されている社会
- ②紛争下で女性が抑圧されている社会
- ③紛争下で女性の参加が拡大している社会
- ④平和で女性の自由・平等・参加が実現している社会

の 4 つに分類できる。戦争がない限り①が多く、戦後の女性のエンパワーメントにつながる③も良く見られる事例であるとのことであつた。

戦争の国際政治は男性優位の象徴的な存在であるが、その戦争にも女性は銃後の支え、軍国の母、女性兵士として参加し、戦後の国際政治の場で、新しい民主主義体制の構築や政治参加の拡大などの成果を挙げている。アジアには、内戦を乗り越えてきた国が多くある。内戦は、他国の介入によって停戦合意に至るよりも、自国内の努力によって停戦合意に至る方がその後の国づくりが上手くいく可能性が高い。現在、アジアの国々の中には、女性のエンパワーメントやセルフ・ヘルプ活動の一環として、共同での野菜栽培による現金収入の拡大や、マイクロクレジットのグループの発足など平和の連鎖の象徴とも言える動きが見受けられる。少女への職業訓練や、少女にディスカッションの経験をさせること、スラムに住む幼児に教育の機会を提供することなどが持つ意味は大きい。

平和を実現するという事は、人びとが将来に夢を持つということの意味する。夢を持つ人が増えれば、平和構築につながっていく。現代国際政治の平和は、草の根からつくられている。私たちは「連鎖」という言葉を耳にしたとき、暴力などマイナスイメージの言葉と結びつけてイメージすることが多いが、世の中にはプラスの連鎖も存在しているという言葉が印象的であると同時に、そのことを実感させられる講義であつた。